

第六回留学報告書

白川亮

マサチューセッツ工科大学

こんにちは、白川亮です。三年目に突入しました。生活スタイルが少し変わりましたので、それも含め簡単に報告させていただきます。

1. 個人的な話

前の学期の終わり頃に両親が遊びにきてくれました。ボストンを案内しようと思ったのですが、ボストンに何があるのか特に分からず、結局自分も行っただろうな観光スポットと一緒に回りましたが、従って結構楽しめました。それから、これまで日本にいた妻が今学期からボストンに来ています。それまでは休日にも特にすることがないのでオフィスに籠る生活をしていましたが、外に遊びに行ったりするようになりました。留学は貴重な時期な気もするので、以前より出かけて海外の色々を知る機会が増えるのはいいことかと思います。

バスケットボールは今学期も最初の方は行ってなかったのですが、船井同期の青木くんがMITの日本人チームを立ち上げることになり、どうやら人数が足りてなさそうだったのでチームに加わることになり、その流れで数回試合に出たりしました。僕は基本的に自分より大きくて健康な相手にパワーのみでやられて終しまいなのですが、僕以外のチームメイト達は結構練習していたのか、思っていたよりも対等に試合をしていました。

2. 大学の話

三年目からはティーチングアシスタントといって、一年間に三科目分、授業の補習や課題の採点等の仕事をする事になっています。担当する授業にもよりますが今学期は結構大変で、研究に使える時間がこれまでの三割程度になりました。

特に博士課程向けの Contract Economics という授業が厄介で、そこでは課題の作成採点に加えて、比較的新しいけれども重要な論文を毎週読み込んで週末に板書の授業をする、ということさせられました。こう言うのは過去に担当した上級生が授業の資料を残している場合も多いと思うのですが、それが実質的になかったので資料作りから準備をする必要があったというのが不運だったと思います。基本的に詳しくない論文を担当したので頑張って準備したのですが、そうすると学生たちに感謝されました。

意味合いは違いますが学部生向けの授業も大変でした。今学期は Network Theory という授業のアシスタントをしたのですが、人気の授業でかなり多くの学生が出席していました。従って学生間で数学レベルの分散が大きく、一方では全く授業に来ないけど課題では「え？解説されてな

いからこんなものは知りません。でも多分こう（例えば $\Lambda = \Lambda$ みたいな、数式のようなものが書かれている）」みたいな、独り言を含んだ何かを書いてくる学生がいて、もう一方では毎回授業に出席して質問をするような熱心な学生もいました。

3. 研究の話

こちらにきてから学生含め多くの素晴らしい研究者たちと話をするようになり、どのような研究が面白いかという価値観が留学前と比べると理解できるようになってきたかなという気がします。例えば留学直後はいろいろな論文の評価に関して「なるほどこいつの言っていることは全くわからん」ということが多かったのですが、今は理解できる場合が多いということです。研究論文は他人に査読をされて評価されるもので、価値観のすり合わせは需要に応える研究をするために多分大事で、従って上述のティーチングのような時間吸い取りイベントを考慮しても、この点において留学する意味は大きいのではないかと予想し、しかしこのことはあまり言われていない気がするので、この場をお借りして書いておいています。

前学期の終わり頃、一年ほど前に書いた論文「Design and Price of Certification」の証明に欠陥が見つかり、その修正に追われていました。共著者の一人が「論文をジャーナルに投稿する前に全体の確認をするべきではないか」と言ったので、そうだなと思って読んだら間違いがあったという感じです。丁度その頃は同期がある事情で消えたりハーバード大学の留学ビザが無効になるかもしれないとか色々暗いニュースが飛び込んだりしていて、結構辛いなと思っていましたが、幸い百時間程度で修正出来ました。修正したあとはついでに論文のプレゼンテーションを再考したりもして、時間はかなり取られましたが論文の質は以前より大分に上がったように感じています。欠陥に気づけなかったことには反省しつつ、結果良ければ良いとします。

それから修士論文と並行して進めていた「Information Structures in College Admissions」という論文が Journal of Economic Behavior and Organization という雑誌に受理されました。学生が試験を受けて、その後好きな学校に出願して、学校は各々の評価に従って学生に合格を出すという状況では、学生は周りの学生をよく知らず、従って自分の相対的な評価についてよく知らない場合があると思います。そのような状況を情報の非対称性のあるマッチング問題としてモデルにして、そこでどのようなことが均衡状態で起きえて、また学生にとって望ましい配分を達成するためにどのように情報構造を設計できうるかを考えています。複雑な状況ゆえに特殊な状況しか考えることが出来ず、鋭い洞察を与えられなかったのですが、おそらく考えている問いは新しいという評価をいただき、事後的にはあまり苦勞せずに受理までいけた気がします。

■ 最後に

ティーチングも今学期で多少慣れましたので、次の学期はより効率的に、研究のために時間を使えると思います。頑張ります。